

フィンテックが広げる金融の可能性 —技術革新が機能にもたらす分析と、資産運用業界への示唆—

瀧 俊 雄 CMA

目 次

- | | |
|---------------------|-------------------|
| 1. はじめに | 4. 金融の変貌可能性 |
| 2. フィンテックが生まれた技術的背景 | 5. 資産運用はこれからどうなるか |
| 3. 金融の可能性を機能面から確認する | 6. おわりに |

フィンテックは、スマホの普及やクラウドコンピューティングの一般化に伴い、様々なサービスの大衆化や低廉化につながった。これらは、金融の基礎的な機能を変えるというよりは、サービス提供コストの前提を変えることで、サービスのあり方が変わり、ひいては利用者のウェルビーイング向上につながるものと考えられる。その中で、より人間を中心としたアドバイスの提供能力が資産運用サービスにおいても問われていくのではないかと

1. はじめに

金融とテクノロジーを組み合わせた造語であるフィンテックは、2015年ごろから盛り上がりを見せ、もはや一般用語となりつつある。筆者はフィンテックが金融サービスの提供方法における根本的な変化をもたらし、やがては家計の資産形成手段や企業の資金ニーズの変容、そして資産運用における意思決定の高度化に資するものと考えている。本稿では、フィンテックがもたらした技術的・社会的な背景を解説しつつ、それが金融機能に与えていく影響を整理し、その上で資産運用ビジネスに与える変化をみることにしたい。

なお、フィンテックと類似する用語として金融工学（フィナンシャルエンジニアリング）がある。二つの用語を厳密に使い分けることは難しいが、金融工学では、おおむね情報処理や専門的なソフトウェアを生かして資本市場で超過収益やリスク管理を狙う「プロ向け」の領域が想定されるのに対し、フィンテックでは、スマートフォン（以下、スマホ）の普及等を通じて金融サービスが汎用化する「大衆向け」の領域を指す印象がある。本稿では、この大衆向けの変化を中心に解説することとしたい。



瀧 俊雄（たき としお）

マネーフォワードグループ執行役員CoPA・Fintech研究所長。2004年慶應義塾大学経済学部卒業。同年4月、野村證券入社。野村資本市場研究所、野村ホールディングスCEOオフィスを経て、2012年よりマネーフォワード社の創業に参画。電子決済等代行業者協会代表理事等も務める。主な発行物に、『FinTech入門』（日経BP社、2016年、辻庸介との共著）がある。